

第6学年1組 国語科学習指導案

指導者 斉川 道夫

研究テーマ 言葉の力を育み 考えたことを豊かに表現する力の育成

1 単元名 人物の生き方を考えよう「海のいのち」（物語文）

2 目標

- 学習課題に興味をもち、進んで読もうとしている。（関心・意欲・態度）
- 文章の叙述を根拠にしながらか自分の考えを發表することができる。（話すこと・聞くこと）
- 登場人物の行動をさまざまな角度から読み、本文を根拠にして自分の考えをもつことができる。（読むこと）
- 比喩表現による描写のよさに気づき、味わうことができる。（言語事項）

3 児童の実態と指導観（男子14名 女子14名 計28名）

小学校卒業を4か月後に控えたこの時期の児童は精神的に大きく成長し、自分の生き方を模索し始める時期である。そしてこれまでの親や教師のひ護を離れ、精神的に自立しはじめる時期でもある。自分自身の存在にも自信をもち始める。本学級の児童においてもその傾向は顕著である。しかし、人間としての体験はまだ足りない。そのため物事を勧善懲悪や二者択一などのステレオタイプな思考で見がちである。しかし、現実世界はそのように単純なものではない。そこでこの「海のいのち」という作品の魅力を生かして、人物の生き方に多面的に迫っていくことをねらいとしたい。なぜなら、本作品はこれまでの比較的単純な物語文と異なり、結末において、太一が瀬の主をとらえることなく生かしてやるという、読み手の予想を大きく裏切るからである。実際、初発の感想において、多くの児童から「なぜクエをとらなかったのか」という疑問があげられている。「なぜだろう」「どうしてだろう」と児童を考えさせる作品だといえる。そしてこの疑問を解決しながら、人間の成長には周囲の人間や、太一にとっての海やクエのように、自然や事象が大きくかかわっていることに気づき、さらには自分自身の生き方を見つめ直していければと考えている。

また、この学習では、どのような言葉の力をつけようとしているのか。それは「自分の考えを明確にもちながら読む力」である。そのためには、優れた描写を味わいながらも、作品を肯定的に読むだけでなく、自分ならどうするか、結末に納得できるかなどのように、作品を評価しながら読ませたい。その際、「それは本文のどこに書いてあるのか」、「本文のどこを引用しているのか」というように、自分の考えには必ず根拠を書かせることで、考える力を中核にしながらか読む力や書く力を総合的に高めていこうと考えている。また、音読や視写を繰り返したり、「読みナビ」という、「一人読みする時のポイント」をしおりとして教科書にはさんで家庭学習で考えさせたりして、文章を十分に理解した上で、思いつきではない、根拠のある自分の考えをもたせるようにする。

質 問 項 目	はい	どちらでもない	いいえ
① 国語の学習は好きですか。	5	20	3
② 物語文を学習するのは好きですか。	14	11	3
③ 授業で発表することは好きですか。	5	10	13
④ まわりの友達で話し合いながらする学習は好きですか。	19	7	2
⑤ 班で話し合う学習は好きですか。	17	8	3
⑥ 友達に質問をするのは好きですか。	6	10	12
⑦ 友達に自分の考えを説明するのは好きですか。	5	12	11
⑧ 意見文を書くのは好きですか。	13	10	5
⑨ 文章を引用しながら根拠を書くことはできますか。	11	12	5
⑩ 自分の考えを書くのは好きですか。	16	8	4

11月17日調べ 回答数28名

本単元の学習を進めるにあたり、上記の意識調査を行った。調査によると、本学級の児童は物語文を読む学習への苦手意識は比較的少ない。これは、日常においても読書を進んで行う様子が多く見られる。真面目で素直な児童が多いので、物語の設定に感情移入して主人公の気持ちに寄り添い、作品に浸ることができることと考えられる。また、みんなの前で発表することは苦手であるが、周りの友達や小グループで話し合ったりすることは大変好んで行う。特に直前まで行っていた前単元「鎌倉ラジオニュースを作ろう」において、小グループで協力しながら活動してきたことによるものと思われる。さらに、意見文を書いたり、根拠を引用して自分の考えを書いたりすることは、抵抗なく行うことができる。これは、2学期から朝の会でのスピーチ「どっちが好きでショー」を継続して行っていること、引用しながら根拠をもとに自分の考えを書く学習を1学期の説明文で行っていること、前単元「意見文を書こう」でのワークシートによる家庭学習を行ってきたことなどによるものだろう。

この結果から、本単元での学習においては主人公の気持ちの変化を追う過程において、小まめにノート作業を取り入れて自分の解釈を理由づけて書かせ、その内容を小グループで意見交換する場を多く設定し、自分と友達との解釈を比較しながら発表したり聞いたりすることができるようにしたいと考える。

4 学習計画(9時間扱い)

次	学 習 活 動	時	評 価
1	○ 本文を通読し、初発の感想をまとめ、学習の見通しをもつ。 ○ 音読によりあらすじをとらえ、登場人物の関係をつかむ。	2	④ 全文を通読し、物語の大体をとらえ、初発の感想をまとめている。(観察・ノート) ⑤ あらすじをとらえ、登場人物の関係をつかんでいる。(観察・ノート)
2	○ 会話文から、それぞれの登場人物にとっての「海」の意味を考える。	3	⑤ 叙述に沿って、太一の「瀬の主」に対する考えの変化を読み取っている。
3	○ 太一が「父の海」にもぐった理由を考えることができる。 ○ 「太一は本当の一人前の漁師になれなかったのか」を考えて発表したり、友達の考え方と比較しながら聞いたりする。	1 1 本時	⑤ 太一の「父の海」にもぐった理由について自分なりに解釈している。(発表・ノート) ⑤ 太一の心の成長について評価している。(観察・発表・ノート)
4	○ 作者の他の作品を読み、テーマについて話し合う。	2	④ 作者の他の作品を読み、テーマについて自分の考えをもっている。(観察・ノート)

5 本時の学習

- (1) 目標 「太一が本当の一人前の漁師になれなかったのか」本文を根拠にして自分の考えをもつことができる。
 (2) 資料 ① マグネット(2色×人数分)
 (3) 展開

(○ 全体 ◎ 個人 ☆ 評価)

配時	学習内容及び活動	形態	資料	指導・援助の留意点及び評価
3	1 本時の学習課題を確認する。 太一は、本当の一人前の漁師になれなかったのだろうか。	一斉		○ 学習課題の意味を補足説明(「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師には…」という文章を提示しながら)して、全員が確実に課題の意味を理解できるようにする。
5	2 自分の考えを持つ。 ・ 「なれた」「なれなかった」のどちらと考えるかノートに書く。 ・ 黒板に自分の考えをマグネットで表示する。 ・ 全体の考えの分布傾向を確認する。	個人	①	◎ 作業が遅れている児童には、個別に声をかけ、必ずノートに自分の考えを書けるようにする。 ○ 「なれた」「なれなかった」が半々程度に分かれると予想される。また、あとで自分の考えを変えてもいいことを告げ、とりあえずどう考えるか決めるように言う。
17	3 第5場面(p78 L8～p82 L3)を正確に理解する。 ・ 音読する。 ・ ノートに本文を視写する。(p80～p82 L3) ・ 次のことを全体で確認する。 『「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。』は自然とそう思えたのか』 「クエを父の仇だと思ふ気持ちが完全に消えてしまったのはどの部分からか」 「太一が瀬の主を殺さなかった理由は何か」	個人 一斉		○ 音読と視写により、文章の内容を正確に理解しながらこのあとの学習が進められるようにする。 ○ 視写しながら、学習課題に対する自分の考えの根拠となる部分を見つけておくように言う。
6	4 学習課題について根拠のある自分の考えをまとめる。	個人		○ 意見を発表するときには、理由を加えるように言う。また、反論を受け付ける。 ○ 「こう思うことによって」という語句に着目した児童を大いに賞賛する。 ○ 「大魚はこの海のいのちだと思った。」に気づけない場合、「～思えた。」と書いてあったときと比較して違いを実感できるようにする。 ☆「太一が本当の一人前の漁師になれなかったのか」、本文を根拠にして自分の考えをもっている。(ノート)
7	5 グループ内で順番に自分の考えを発表する。	グループ		A 「～」と書いてあるというように叙述を根拠にしなが、太一の心の変容に触れながら自分の推論を書いている。 B 叙述を根拠にしなが、自分の推論を書いている。
6	6 グループでもっとも納得度の高かった意見を全体に発表する。 ・ マグネットの自分の考えを見直す。	一斉		◎Aの児童には、さらに「村一番の漁師」との違いについて検討するように言う。 ◎Bの児童には、太一の心の中に入り込んで考えてみるように言う。(日記風に言わせるなど)
1	7 次時の課題を確認する。	一斉		○ どの意見も大きな拍手で認める。 ○ 友達と自分の意見とを比較しながら聞くようにアドバイスする。 ○ 課題については最終的には児童一人一人の判断に任せるオープンエンド形式とする。

